

第13回高知県立病院経営健全化推進委員会議事要旨

- 1 日時 平成31年1月17日(木) 18:30~20:30
- 2 場所 高知共済会館 3階 桜
- 3 出席者 委員 : 宇田委員長、臼井委員、奥谷委員、執印委員、
野並委員、廣光委員、宮井委員
公営企業局 : 北村局長、岩村次長
県立病院課 : 猪野課長、岡崎課長補佐、伊藤課長補佐
あき総合病院 : 前田院長、松本経営事業部長、平瀬看護部長
幡多けんみん病院 : 橘院長、坂本経営事業部長、横山看護部長
- 4 議事 以下のとおり

(1) 平成29年度及び平成30年度の経営状況について

県立病院課、あき総合病院、幡多けんみん病院から資料1、資料1-2、資料1-3等により説明した後、意見交換を行った。

[意見交換]

(委員)

- ・安芸地域では、30年前には8万人いた人口も、今では5万人程度に減少している。それにともない、医療機関の数も減ってきている。休日や夜間の診療、入院への対応等、地域の医療は不足している状況にある。室戸の診療の問題等で、特にこの1年、それがより顕著になった。今後、地域全体で協力していかなければいけないところだとは思いますが、また、何かあれば教えてほしい。
- ・あき総合病院で病床利用率が上がった要因は。

(あき総合病院)

- ・救急をお断りすることがなくなったからだと思う。救急受入については、現在年間1,960件程度であるが、限られたスタッフで対応しているため、疲弊の色が見え始めている。救急専属の医師を雇う等、対策を講じない限り、外来をしながら救急もしていくのは厳しい。

(委員)

- ・精神病棟の入院患者については、今、長期ではなく、在宅への移行等、短期の入院患者が増加傾向にあると言われているが、その中でも、あき総合病院の同病棟の病床利用率は高い。安芸地域では、同病院以外の精神病院もあるが、ニーズはどのくらいなのか。

(あき総合病院)

- ・統合失調症の患者については、若年の発症が多いため、減ってきているが(地域で若年の人口自体が減ってきているため)、認知症の患者は増えてきている。昨年6月、高知医療

センターの精神病棟が稼働したこともあり、今後、徐々に当院の精神病棟の入院患者が減っていく可能性はある。(精神と)身体合併症の患者については、積極的に受け入れるようにしている。

(委員)

- ・職員の採用については、医師だけでなく、看護職員、事務職員、コメディカルも難しいと思うが、どのような状況か。

(あき総合病院)

- ・募集をかけても、人手不足でなかなか人が集まらない状況。かなり前もって周到に準備をしておく必要がある。

(公営企業局長)

- ・職種では、薬剤師が最近特に少ない。

(幡多けんみん病院)

- ・今、働き方改革で議論されている(労働時間等の)内容を受け入れることになると、更に人員が不足する。今後、このままでという訳にはいかないが、考えていく必要はある。

(委員長)

- ・幡多けんみん病院に隣接している幡多看護専門学校では、看護師は残ってくれているのか。

(幡多けんみん病院)

- ・毎年30人余りの看護師を輩出しているが、そのうち8割程度は県内に残ってくれている。

(委員)

- ・県東部でも(看護師養成の学校設立について)話が出ており、今後は県が市町村と協議しながら進めていくことになったが、あまり進んでいないように思われる。

(委員)

- ・幡多地域においては、以前は10万人いた人口も、今では8万人程度に減っているが、幡多けんみん病院と地域との連携は、院長をはじめ、同病院職員の方々と十分にできていると思う。
- ・脳疾患に対するt-PA治療(血栓溶解療法)等、短時間での対応を求められるような疾患については、県東部・西部において、より近い場所ですぐに実施できるよう配置し、大学や拠点の病院につなげられるよう、戦略的に進めていく必要がある。

(あき総合病院)

- ・当院では現在、脳神経外科の医師は2名おり、同治療の施設基準はとっていないものの、該当の患者に対しては、t-PAを点滴しながらドクターヘリで大学に搬送している。

(幡多けんみん病院)

- ・幡多地域では距離的に離れていることもあり、全て当院で対応する。ICU等、迅速に実施できる体制をとっており、救急隊員との連携のもと、疑わしい症例も含めて、(該当の患

者は) 当院へ搬送するようお願いしている。

(委員)

- ・服薬指導件数が両病院とも増えている。医薬品使用効率(平成29年度はあき総合病院:82.6%、幡多けんみん病院:83.8%)や薬価基準の改定等については、どの程度、経営に影響しているのか。

(あき総合病院)

- ・服薬指導については、現在、(院内処方が減った分)薬剤師が直接病棟に行き、指導しているが、比較的点数の高い退院時の服薬指導については、患者の回転が速いため、タイムリーに対応できていない現状がある。薬品については、抗がん剤等で70~80万円ぐらゐの高額なものも使っている。

(公営企業局長)

- ・院外処方については、力を入れてやってきた経緯があるが、服薬指導を行う薬剤師が足りない現状がある。ジェネリックの使用率については、両病院で85%以上となっている。

(2) 第6期経営健全化計画の取組状況について

あき総合病院、幡多けんみん病院及び県立病院課から資料2により説明した後、意見交換を行った。

[意見交換]

(委員)

- ・医療人材の安定確保について、病院から大学に訪問していただいているが、全体のバランス等もあるため、地域医療支援委員会を設置し、そこを通すようにしているので、ご理解をいただきたい。
- ・地域連携については、両病院とも早い時期から、地域の色々な方々を巻き込んで取り組まれている。看護師の確保については、7対1の維持や平均年齢の上昇、働き方改革等の問題もあるが、いい方向に検討してもらえたらと思う。

(あき総合病院)

- ・当院の看護師は40代後半が一番多く、一番少ないのが20代~30代前半。勤務は変則2交代で行っており、効率的に仕事ができる体制を整えているものの、50代の看護師が20代の看護師と同じ仕事をするといった厳しい現状がある。

(委員長)

- ・地域によっては、急性期病院と、在宅や療養病院で人事交流を行っているところもある。

(公営企業局長)

- ・現在の県立病院職員の平均年齢は41~2歳であり、採用する側としても、年齢が偏らないように配慮しているが、当面の看護体制を充実させていく必要もあり、今の状態となって

いる。今後、民間病院や派遣等、県東部の看護師養成学校のことも含めて、こういった形で支援をしていくかは検討をしていく。

(委員)

- ・今年10月からの消費税の増税については、計画の中に見込んでいるのか。

(公営企業局長)

- ・計画には見込んでいないが、平成31年度の予算には見込んでいる。

(委員)

- ・BCPについて水の確保等、大まかな部分は出来てきたが、細かい部分についての取り組みはどうか。

(公営企業局長)

- ・県立病院では、1週間分の水や電気等を確保し、診療を行えるようにしている。

(あき総合病院)

- ・近くの病院の透析患者も災害時には当院で受入をするようになっている。1週間はもつようにはなっているものの、透析は大量に水を使うので、場合によっては他医療機関への搬送も検討するかもしれない。

(委員)

- ・災害訓練において、より確実に行える通信・連絡手段はないか教えてほしい。

(あき総合病院)

- ・昨年7月豪雨では、防災無線やNTT（固定電話）が通じなくなったが、PHSはつながった。連絡手段については、色々なツールを持っておいた方が良いと思う。